

## 4

## 座談会

## 若手職員から見た未来像

下水道は県民の生活を支える上で欠かすことのできないインフラです。通水 50 周年を迎えた荒川流域左岸南部流域下水道ですが、次の 50 年も持続して事業を行っていかねばなりません。社会環境が激変し、新たな課題の解決が求められる中、未来に向けて事業を支えていくのは若手職員です。そこで、4 名の若手職員に集まって頂き、業務のやりがい、新たに取り組みたいこと、今後期待する技術などについて自由闊達な意見を頂きつつ、目指すべき未来像に迫りました。

（収録日：令和 5 年（2023 年）9 月 5 日）

## 出席者

**山崎 達也** 埼玉県下水道事業管理者  
**加藤 颯** 埼玉県荒川左岸南部下水道事務所 工務・修繕担当技師  
**吉村 成貴** 埼玉県荒川左岸南部下水道事務所 設備担当技師  
**柴崎 康太** 埼玉県荒川左岸南部下水道事務所 設備担当技師  
**町田 健太郎** 埼玉県荒川左岸南部下水道事務所 総務・管理担当主事

## 司会

**坂田 竜也** 埼玉県荒川左岸南部下水道事務所長

## ■はじめに

**坂田** 皆さんも御存じのとおり、荒川左岸南部流域下水道は、荒川左岸に位置する埼玉県南部の 5 市、さいたま市、川口市、上尾市、蕨市、戸田市を管轄しており、昭和 47 年（1972 年）10 月に供用開始し、令和 4 年（2022 年）10 月に供用開始 50 年を迎えたところです。

県内では最も古く、国内でも 2 番目に歴史のある流域下水道です。処理面積は約 18,100ha、処理人口は約 197 万人、年間の処理水量は約 2 億 6,200 万 m<sup>3</sup>、処理量では、日本にある流域下水道の中で最大規模です。供用開始から 50 年が経過し、事業の中心は、下



司会：坂田所長

水道の建設や普及から、計画的な維持管理、老朽化施設の更新へと軸足が移っています。さらに、CO<sub>2</sub> の排出削減といった地球温暖化対策にも取り組みながら 24 時間 365 日、絶え間なく流域下水道サービスを提供できるよう、安定的・持続的な下水道事業の管理運営に努めなければなりません。

本日は、荒川左岸南部流域の下水道業務を最前線で支えている 4 名の若手職員に集まって頂き、下水道事業に関する「若手職員から見た未来像」についてお話し頂きたいと思います。未来像を語るに当たり、採用されてからのキャリア、現在担当している業務を通じた学びなど、これまでの自分を振り返ってみてください。その上で下水道事業の未来について想像を膨らませて頂ければ、より柔軟な発想で自由な意見が出せると思います。今回は、議論を整理していく上で、現在から未来へと順を追って、テーマごとに皆さんに発言

して頂きます。

座談会の冒頭に、今年度から下水道事業管理者として着任された山崎管理者から、この4月から現在まで埼玉県の下水道事業に携わってきた中で、感じたことや事業の役割、重要性についてお話し頂きたいと思えます。

**山崎** 一言で言えば、知れば知るほど本当に大事な仕事だと感じています。もともと下水道について詳しく知っていたかという決してそうではなく、実際には下水道事業管理者に着任してから日々が勉強です。



山崎管理者

実は先週、令和元年東日本台風で決壊した千曲川の現場を視察しました。台風の時に流域処理場も浸水被害を受け、処理場の1階部分が半分くらい浸水し、職員19人が2階に避難したとのこと。住民の方に対し、「お風呂はシャワーのみにしてほしい。シャワーの回数も減らしてほしい」

### ■業務のやりがい

**坂田** それでは、若手職員の皆様にお話し頂いた後に、山崎管理者からメッセージや助言などを頂きたいと思えます。まずは、業務のやりがいについて、入庁してからの仕事、これまで感じてきたことなどを振り返ってお話してください。

**加藤（工務・修繕）** 私は入庁して3年目ですが、事務所で様々なことに取り組んでいます。マンホールの浮上診断や紙保管であった台帳の電子化、再構築事業や耐水化に携わっています。その中でも、荒川水循環センターの場内整備が一番印象に残っています。数十年間、未整備の状態だった場所に舗装をかける仕事でしたが、設計から工事まで土木職としての一連の流れ

「食器や洗濯物はまとめ洗いにして節水してほしい」など、下水道使用量の削減依頼を行ったそうです。話を伺って、24時間365日稼働して当たり前とされているものが止まるというのは大変なことなのだと認識しました。ましてやトイレが使用できなければ命に関わることになります。不衛生であり、水分摂取を抑える人も出てきて命が危険にさらされる可能性もあり、下水道の仕事は本当に重要な仕事だとひしひしと感じました。「停電」や「断水」という言葉はありますが、「停下水」、「断下水」という言葉はなく、そもそも下水道が使用できなくなることが想定されていないのだと思います。

もう一つは経営という観点が重要だと感じています。一般会計からお金が全く投入されていないわけはありませんが、公営企業ですので基本的に流域下水道事業の管理運営は流域関連市町から頂く維持管理負担金の中で行っています。地方公営企業法の中にあるとおり「経済性」と「公共の福祉」という二つのキーワードの中で、効率的で機能的な運営をどのように実現していくのが大事な仕事だと感じています。

を学ばせてもらいました。入庁1年目ということもあり、ほぼ知識がないまま設計に携わったため、掘るたびに電気や水道の埋設物がたくさん出てきましたが、毎日現場に行き、業者の方と相談し、無事事故もなく完成までたどり着くことができました。出来上がった道路を見たときには、この仕事をするために自分の存在があったと認識するとともに強いやりがいを感じました。また、場内整備で道路を造っていると周囲に様々な施設があることを実感し、この工事を通じて処理場の実態を知ることができ、とても良い経験になったと感じました。

**吉村（設備）** 現在の業務は、主に処理場とポンプ場

設備の改築工事の発注や監督業務を行っております。入庁2年目ですが、入庁当初は下水道に携わるのが初めてで、大学でも専攻しておらず全く分からないことだらけでしたが、先輩の柴崎さんと一緒に現場に足を運んで話を多く聞き、現場を見て、施設の様々なことを覚え学んだ1年でした。2年目になり、昨年度からの工事の発注分を引き続き担当しつつ、今年度も数件の発注をしており、これから本格的に工事が動き出すため、現在、現場に入るための調整を行っています。発注した工事が具体的に動き出すことに、強いやりがいを感じているところです。まだまだ分からないことも多いですが、日々勉強にも励んでいます。

**柴崎（設備）** 業務の内容は吉村さんと同じく、下水処理プラント設備の工事発注及び管理を行っております。これまでの業務を通じて、まず業務の規模の大きさに驚いています。それと同時に業務の大変さや責任の重さを実感しております。

また、24時間365日動いている下水処理場において、運用を止めることなく新しい機器の据え付け工事を行うことは非常に難しいと感じております。この2年半で埼玉県下水道公社（以下、「下水道公社」という）の方々や関係機関との連絡調整の重要性を学ぶことができました。

例えば、1個の小さいポンプを止めただけでもその先の設備が動かなくなってしまうため、どこの設備と関連性があるかなどを関係者全員で周知し、あらかじめ時間帯を決めて設備への影響をなるべく少なくすることが求められます。

たくさんの方々の努力に支えられながら、県民の生活を支えるインフラ設備に携われることにとってもやりがいを感じております。

**町田（総務・管理）** 私は、総務・管理担当として主に事務業務に従事していますが、災害時の対応につい

### ■今後、取り組みたいこと

**坂田** 次に、下水道施設の現状を踏まえ、今後取り組みたいこと、コロナ禍など転機を乗り越えて感じたことなどお話しください。

**柴崎（設備）** 荒川左岸南部流域下水道が50周年を迎えましたが、それと同時に設備の老朽化もより一層

では下水道局など公共インフラを担う部署だからこそ経験できる業務ですので、とてもやりがいを感じています。

例を挙げますと、令和5年（2023年）の6月の台風においては、私の水防対応班が、対応に当たることになりました。その日は、通常の業務時間から大雨警報が出ており、夜中には、複数のポンプ場が警戒水位を超えたためバイパス管を開放したり、マンホールから溢水し蓋が開いてしまったり、危険な状況が続いておりました。そのため、できる限り最新の情報を入手し、下水道公社にマンホールの点検を依頼するなどして危機を乗り越えることができました。ここまで危機的な状況になる対応を今までしたことがなく、苦労しましたが、災害への対応を通じ下水道事業の公共インフラとしての重要性をより感じる事ができ、大変貴重な経験をする事ができました。

今回の経験をしたことで、普段から危機管理への対応の準備をしておくことの重要性を改めて認識しました。下水道局でもBCP図上訓練などの各種訓練を実施していますが、これらにも積極的に参加をして普段から災害対応の準備をしておく必要があると感じております。

**坂田** 皆さん、大変しっかりした話をして頂き嬉しく思います。

工務・修繕担当だと業務の中で設計から完成までの過程を見ていく中で、自分が造りたいもののイメージが徐々に湧いてきたと思います。設備担当だと柴崎さんの話にもあったとおり、何か止めるとその先全てに影響してしまいますので、全体像を俯瞰できないと難しいことがあると思います。

町田さんもなかなか経験できない災害対応で大変だったと思いますが、様々な発見があったと思います。

進んでいると考えております。今後は老朽化の進行に合わせて、設備の更新が立て込んでくると思います。そのような中でも古い機器は、計画的に最新機器にアップデートする必要があります。

コロナ禍を通じて、業務のDX（デジタル・トラン

スフォーメーション)化やリモート化も進んできています。リモートでの新たな働き方の有効性や実用性を非常に感じております。今後は、最新技術を踏まえた設備の改築や更新に携わることで、現場に人がいなくてもすぐにリモートで対応可能な下水道施設の仕組みを作るような業務に取り組んでいきたいと考えております。

**町田(総務・管理)** 私は新たな働き方を積極的に取り入れ、今後の業務に取り組んでいきたいと考えています。令和4年(2022年)4月に入庁しましたが、その時点で既に新たな働き方の代表ともいえるテレワークの制度がありました。

しかし、テレワークの活用状況について事務所全体で見ると、技術職においてはどうしても現場を管理する必要があるため、制度を活用している職員が少ない状況ですが、事務職の多い総務・管理担当においても制度が活用されていませんでした。

私の担当業務の場合はパソコン上で業務を完結できるものが多く、制度を上手に活用することで業務効率化を図れるのではと考え、取り入れてみることにしました。

テレワークには様々なメリットを実感しています。通勤時間がかからない分、家事の時間を作れますし、集中したいときには業務効率化を図ることができています。その反面、対面業務と比べるとどうしてもコミュニケーションの質が下がってしまうと感じています。対面では更に一歩進んだ議論等もできるので、偏らずに、バランスよくテレワークを活用していくことが業務効率化につながると感じています。

テレワーク以外にも、様々な制度が整いつつありますので、これらを積極的に活用することでより業務効率性及び生産性を高めていきたいと考えています。

**加藤(工務・修繕)** DX関連について機会を頂けるのであれば、積極的に取り組んでいきたいと考えております。荒川水循環センターでは、施設配置や埋設物の管理が全て紙で行われています。テレワークに取り

組もうと県庁は進めていましたが、設計業務や工事を進める上で事務所に自分がいなければ仕事が成り立たないことがよくありました。

現状は図面だけスキャンができていますが、図面だけですと工事内容が分かりにくいいため工事設計書ごとに内容を電子化して管理していけたら良いと思っています。検索しただけで工事内容が確認できるようになることで、テレワークでの業務効率性が上がり、事務所に通わなくても通常の業務がこなせると思います。

下水道局ではDXワーキングも開催されていますので、私も荒川左岸南部下水道事務所の取組と今後の方針に貢献できたら良いと思っています。

**坂田** 今年2年目、3年目を迎える皆さんは、学生生活の終わりから入庁後もコロナ禍で身動きが取りにくかったと思います。

この5月から、ようやく新型コロナウイルスも感染法上の扱いがインフルエンザと同様の5類へと変わり、従前より制約を受けずに動けるようになるなど社会情勢も変わり、仕事の幅も広がりを感じたことなどがあったと思います。

それでは、これまで出ました職員からのコメントについて、山崎管理者からメッセージや助言などをお願いします。

**山崎** 皆さんも話されていたとおりDXの流れが確実にあります。この流れがコロナ禍前に戻るといことはもうないと思います。

これからは下水道施設管理や工事等に関するDXを更に推進し、仕事の生産性の向上を図っていくことが必要になってきます。他の事務所の例ですが、荒川右岸流域下水道では流量計データのクラウド化による遠隔監視化を進めています。下水道局として処理場・ポンプ場全体のBIM/CIMモデル構築に向けた処理場施設の3次元点群データ化、管路情報システム等による情報の共有化などにしっかりと取り組み、より仕事の効率化を進めることによって経営基盤を強化していく必要があると思います。



### ■ 取組に期待すること

**坂田** それでは、今後の下水道事業に対する思いなどについて、話題を変えたいと思います。

未来に向けたテーマとなる冒頭に、改めて山崎管理者から今後の下水道事業に対する取組に期待すること、頻発化・激甚化する災害への対応、期待している新技術などについて、お話し頂きたいと思います。

**山崎** 流域下水道事業は 24 時間 365 日絶え間なくサービスを提供することが使命です。まずは、下水処理システムの保全や災害対策の強化など下水道本来の機能を将来に向けてしっかりと「持続」していく。管きよでいうと設置後 50 年以上経過した管きよが荒川左岸南部流域では 35km、経過年数が最も古い管きよは 57 年経過しているものが 3 km あります。ストックマネジメント計画に基づいた計画的な改築を行っていくことが非常に大切になります。併せて災害対策についても、総合地震対策計画や耐水化計画に基づき着実に進めていくことが大事です。

一方、これから期待することとしては、新しい技術を積極的に活用して地球温暖化対策や脱炭素化、DX を牽引していくなど、新たな役割を果たして「進化」していくことです。県庁全体の温室効果ガス排出量の約 55% が下水道局の排出量です。流域下水道の使う電力量は年間約 3 億 kWh、これは世帯数でいうと約 7 万世帯の人が使っている量になります。県の地球温暖化対策実行計画が昨年（令和 4 年）3 月に改正され、2050 年にはカーボンニュートラルを目指すとしています。下水道局として、いかにしてこれを実現していくか、非常に重要な課題になってくると思います。

新技術を取り入れることは、必ずしもうまくいかないこともあると思います。しかしながら、新技術をよく研究して積極的に取り入れていくチャレンジが必要です。是非、若い方々には新技術に関心を持ってもらい積極的に取り組んで頂きたいと思います。

**坂田** 皆さんの今後期待する技術や実現したい夢などについて考えていることをお話しください。

**吉村（設備）** 日々、メーカーから様々な技術が開発されている中で、私が特に注目しているのは MBR（膜分離活性汚泥法）です。MBR は、荒川左岸南部流域下水道のさいたま新都心浄化プラントにて導入予定となっていますが、荒川水循環センターでも導入すれば良いのでは、と考えております。MBR 導入により現状の水処理施設の半分程度の面積で、現状とはほぼ同等の処理能力を得ることができます。荒川水循環センターは用地が限られているので、現状の水処理施設を同じ場所に改築することしかできない状況です。MBR を導入し、用地に空きスペースができれば新たな施設を建てることができ、今後の改築の幅が広がると考えられます。MBR などは様々なメーカーが取り組んできているので、新たな技術を積極的に導入していくのが良いと思っています。

**加藤（工務・修繕）** 私の今後期待する技術は、土木分野の IoT です。昨今の人手不足で IoT 化が進んでいると感じています。現場管理について、遠隔臨場などで映像を見ながら造ったものを管理することができることや、VR（仮想現実）や AR（拡張現実）についても展示会でよく聞きますが、私が特に注目して

いるのは点群による建物の管理です。スキャンすれば建物を三次元的にすぐに画面で見ることができるといふことで、テレワークや場所にとらわれずに仕事ができるということに期待しております。

しかし、点群データはデータ量が多く、パソコンの処理能力も必要になるため、AI 技術などを使って点を面にして自動的に生成できれば、現場でスキャンしたものをすぐにパソコンで確認できると昨今の人手不足に対応していけるのではないかと考えています。

下水道の観点で言うと、湿気やガスの影響が大きい管きょ等では、現在の先進機器が使えないようです。マンホールに使える三次元モデルができてきたら良いと考えております。

**町田（総務・管理）** 管理担当として、事務処理の効率化のために、統一のシステム化を進める必要があると考えています。私は、主に管理の業務を担当しているため、各種台帳や申請書類等を確認する機会が多いのですが、まだまだ紙の書類に頼っている部分が多く、必要な書類を探すことに時間を割いている状況です。

アナログな部分に頼っている現状から DX を進めていき、将来的には台帳情報や申請状況を、統一のシステムで一元管理できるようにすることで、業務時間を削減していくことが必要になってくるのでは、と考えています。また、こういった統一システムを一般の方々にも閲覧できるようにすることで、事務所に直接問合

せが入る部分もシステムを閲覧すれば解決できるようになり、問合せ対応の時間を短縮できるといった効果も期待できると思います。

**柴崎（設備）** 今後期待する技術は、最新の省エネ・創エネ技術を用いた設備の導入です。下水道局の事業では、温室効果ガスの排出量は県全体の5割以上を占めているため、導入に最も力を入れるべきだと考えております。

現在業務で携わっている荒川水循環センター内に建設中の新2号焼却炉設備は、多層流動焼却炉と言い、都市ガスの使用量削減及びN<sub>2</sub>Oの発生抑制ができること、排熱発電設備の導入による創エネ、今までの設備からの消費電力量の削減が見込まれており、新技術の導入を目の前で実感しております。

今後も新技術に関して知見を広げていき、温室効果ガスの削減を推進していきたいと考えております。

**坂田** 皆さんすごく勉強されていますね。新しい技術は私も好きですし、夢が膨らむ話だと思います。是非そういう機会をとらえてメーカーの方とお話するのも良いことだと思いますし、どこか他の地方公共団体で新技術を採用した場合は視察に行ってください。土木職の職員であれば、今後は河川、道路、橋梁など違う分野で、違う技術に触れる機会もあると思いますので、そこでも積極的に勉強してもらえればと思います。

## ■思い描く未来の姿

**坂田** 昨年（令和4年）は荒川左岸南部流域下水道が供用開始50周年を迎え、記念すべき年となりました。50年の節目を迎えた下水道について現状の下水道施設整備、改修、下水道の果たす役割等、思い描く未来の姿について考えていることをお話しください。

**町田（総務・管理）** 下水道事業を未来まで維持していくために、下水道公社との連携をより強化し、安定した下水道事業の運営を行っていくことが重要であると考えています。

事務所と下水道公社が離れた場所に位置しているため、どうしても対面のやり取りよりも電話やメールでのコミュニケーションが多くなり、こちらの意図が正確に伝わらないことがありました。

こうした状況を鑑みると、今後の在り方としては、現在の埼玉県と下水道公社の曖昧になっている業務の役割分担を改善し、より明確にしていくことが必要になると思います。そうすることで、スムーズに業務を進めることができるようになり、結果として、質の高い管理運営ができるようになるのではと考えています。また、県として公社の高い専門性を最大限発揮してもらおうよう、一方的な指示にならないよう、公社の意見も聞きつつ、円滑な下水道事業の運営をしていくことが、今後も重要になってくるのではないかと考えています。

**柴崎（設備）** 50周年を迎えて、設備の改築がピークになっています。今後も施設を改築していく中で、

市民の方や地域の方々に愛される下水道を目指し、汚い、臭う、騒音、排ガスなどの市民不安を払拭していくためにも、新技術の導入を念頭に置いて改築を行いたいと思います。

今後も昨年（令和4年）に50周年を記念して開催した「荒川・下水道フェスタ」のようなイベントを開催し、未来においても街から応援されるような下水道事業になっていければと思います。

**加藤（工務・修繕）** 思い描く下水道の未来の姿は、「下水道の見える化の整備」を進めていくことです。近年の豪雨、老朽化に備えて、豪雨時の管内水位を一般公開すると県民の皆さんの内水被害の危機感や意識向上につながると思います。県の職員としても危険なポイントを見つけやすいこともあり、24時間365日動く下水道を健全に提供できるのではないかと思います。下水道データの三次元化も進めていきたいです。

下水道というのは埋設されているものなので、基本的には見えず図面では正確さに欠けます。点群測量などの技術を積極的に取り入れていくことで、地上のデータと埋設されているデータが重なり合って、正確な埋設管が管理されている未来があると考えています。

**吉村（設備）** 50周年を迎え、設備の老朽化がかなり進んでおり、それに伴い改築更新が随時行われていくことと思います。また今後、流域の人口減少や技術者の高齢化などによる人手不足も深刻になってくると考えられます。

下水道事業は市民の生活を支えていることから、止めるわけにはいかないため、新技術の導入などにより維持管理の向上や効率化を図り今後の展開を見極めて時代のニーズに合わせた改築更新を推進し、下水道の維持管理を行っていく必要があると考えます。

**坂田** 将来の話がいろいろ出て良かったと思いました。それでは、これまで出ました職員からのコメントについて、山崎管理者からメッセージや助言などをお願いします。

**山崎** 皆さんのお話を伺って本当に下水道事業に関して問題認識、課題認識を持っており、更にこうあったら良いなどの前向きな考え方を持って頂いており、素晴らしいことだと思っています。是非、こうした

考え方をこれからも大切にさせて頂いて、職場でも積極的に発言して頂きたいと思います。ともするとこれは無理かなと思ってしまうかもしれませんが、皆さんの問題意識や課題意識が仕事を変えていきます。私としても積極的に応援していきたいと思っております。新たな試みが失敗することもあるかもしれませんが、チャレンジしたことがうまくいかないこともあります。でもトライしていかないことには新しいことは生まれません。全力で応援していきたいと思っておりますので、頑張ってくださいと思います。地球温暖化の話をお先ほどいたしました、県では2050年にカーボンニュートラルを目指すことになっております。正直、下水道局もまだカーボンニュートラルについての絵は描き切れていません。空白のキャンバスに絵を描くのは難しいことですが、やりがいもあると思います。皆さんに大きく期待しています。本日、発言いただいた様々な問題認識、課題認識を大事にして頂いて将来の下水道事業を支えていって頂きたいと思っております。

**坂田** 先ほども申し上げましたが、いろいろなアンテナを張って他の地方公共団体や事務所がどのようなことをしているかを知って頂くのが良いと思います。同期などの仲間で話す機会も良いですし、中川下水道事務所や荒川北部下水道事務所など下水道局内の他の事務所との情報交換をすることも良いと思います。また、他部局にも目を向けて埼玉県全体としてどのような方向に進んでいるのか、などを把握して頂ければと思います。

若手職員の皆さん、本日はありがとうございました。最後に、山崎管理者から本日の総括となるコメントを頂きたいと思います。

**山崎** 私は昭和61年（1986年）に福祉部で採用になりましたが、当時は基礎年金の制度ができたばかりの頃であり、まだ高齢化は顕著ではなく実感としてありませんでした。30年後には高齢化は大きな社会問題になるだろうが、決して暗い未来ではなく、高齢者が多くなることは、ある意味福祉という概念が、特定の人のためのものという概念から一般化していくのだ、と言われていたのを覚えております。つまりはみんなが高齢者になるから、バリアフリー化なども進み、

みんなが住みやすい社会になるということです。

それから37年が経ち、振り返って世の中どうかというと、いろいろ問題はありますが決して悪い方向には向かっていないと私は感じています。

介護等に関して新しい技術も生まれてきて、介護保険制度もできましたし、様々な問題が出てきても、いろいろな知恵で問題を解決してきていると思います。

先ほど2050年の話をしましたが、それを担っていくのは皆さんです。決して暗い未来ではなく更に明るい未来になっていくと私は信じております。是非皆さんにはそんな明るい未来を、社会を、埼玉県を創っていくんだという気持ちで仕事に取り組んで頂きたいと思います。

皆さんは下水道の仕事だけでなく、様々な仕事をしていくことになります。そうした中でも下水道の仕事は、なかなか周りからも理解されにくく目立たない仕事だと思います。しかし、とても大事な仕事であるということは間違いありません。4月の中旬に事務所へ挨拶に伺った折申し上げたかと思いますが、詩人であり書家である相田みつをさんの詩に「土の中の水道管、高いビルの下の下水、大事なものは表にでない」という詩があります。見えにくいけれど大事な仕事をしているんだという下水道局のプライドを持って仕事に励んで頂きたいと思います。

**坂田** 山崎管理者がお話しされたように、今の技術がもしかしたら20年経ったら当たり前のように古い技術になっており、今一生懸命新しくトライしている

ことが当たり前になっているかもしれません。

私が大学生の時には舗装を研究していましたが、排水性舗装は今や高速道路に当たり前採用されています。当時は高速道路で実用化されているところも一部ありましたが、まだ試験舗装をやっている段階でした。最初にこの舗装道路を車で走った時は「すごいな」と思いました。今は街中、市街地でも採用されています。身近にこのような技術が出てきたということはすごいなと今でも感じています。排水性が良いということは空隙が多いので、いろいろなアスファルトの材料を使って試験を行っていたわけですが、硬ければ割れてしまいます。硬さ、柔らかさのバランスを材料メーカーと考えて道路舗装関係者が研究所で一生懸命、実用性を考えていくわけです。

新しい技術に触れて、なぜこういう技術が出てきたか、時代の背景、研究に携わった人に話を聞ける機会などがあると視野が広がって自分の仕事が楽しくなると思います。

繰り返しになりますが、埼玉県全体でどういう方向に向かっているか、知事がどういう目標を掲げているかを新聞であったり、職員ポータルであったりで情報を拾って取り残されないようにしてください。変化が速いですから、取り残されないように前を向いて皆さん頑張っていて頂ければと思います。

以上で若手職員と山崎下水道事業管理者の座談会を閉会します。ありがとうございました。